

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520362

研究課題名(和文)自然科学とエゾテリウムの「あわい」で フェヒナーからフロイト、ベルクソンへ

研究課題名(英文)Between natural science and esoterism - From Fechner to Freud and Bergsons

研究代表者

福元 圭太 (Fukumoto, Keita)

九州大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：30218953

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀ドイツの物理学者・哲学者であるグスタフ・テオドール・フェヒナーの、自然科学と自然哲学の境界領域にまたがる思想を明らかにし、厳密な実証主義的自然科学者にして、同時に汎神論的な自然哲学者であろうとしたフェヒナーが創出した新たな学問である「精神物理学」の枢要を論じた。またフェヒナーから影響を受けた後代の中で、とりわけ深層心理学者ジークムント・フロイトに注目し、フロイトの夢や機知の理論にフェヒナーが与えたインパクトを分析した。

研究成果の概要(英文)：The research project aims to clarify the thoughts of Gustav Theodor Fechner, a German physicist and philosopher in the 19th century, which are located between science and philosophy. For this purpose the new science "psychophysics", founded by Fechner, was discussed in detail. It was also analyzed, which influences Fechner had exerted upon Sigmund Freud in regard to his theory of dream and wit.

研究分野：独語・独文学

キーワード：フェヒナー フロイト 自然哲学 精神物理学

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の動向と位置づけ

本邦におけるフェヒナー研究は、本課題の研究開始当初、申請者によるもの以外は、管見する限りで皆無に等しかった。国内のフェヒナー研究者数も申請者を含めて現在までに5名程度であり、**国内のフェヒナー研究はきわめて手薄な状況にあった。**

一方ドイツでは2004年にフェヒナーの大部の日記(2巻本)が刊行され、アメリカでも2010年頃からフェヒナーの主だった著作がリプリント版として次々刊行されていた。「フェヒナー・ルネサンス」とまでは言えないものの、**欧米ではフェヒナーへの関心が高まりつつあった。**ドイツでは2001年、フェヒナーが奉職していたライプツィヒ大学で、「フェヒナー生誕200年シンポジウム」が開催され、遅れて2010年にはそのシンポジウムの論集(『グスタフ・テオドル・フェヒナー 著作と影響』)が出版された。

本研究は、国内ではほとんど注目する研究者がいないうち、欧米で再び関心を集めつつあるユニークな思想家フェヒナーの思想と影響を、**平成20年~22年の申請者による研究を進展させる形で引き続き解明しようとする試み**であった。

### (2) 着想に至った経緯

申請者はこれまでに得た科学研究費補助金により、「ドイツ青年運動における非合理主義」、「ヘッケルの生物学的一元論と自然神学」、「マッハの要素一元論と自我の崩壊」、「フェヒナーの精神物理学とその神秘主義的傾向」といった内容の研究を遂行してきた。これらの研究は「**実証主義的自然科学が席捲する時代に伏流する神秘主義的自然哲学の水脈を探る試み**」、あるいは「**科学とエゾテリウムの独特な救済論的混交の分析**」と約言することができる。それは即ち、20世紀初頭の非合理主義・肉体および自然崇拜、スピノザ的「神即自然」の系譜を、ヘッケル、マ

ッハ経由で**フェヒナーという淵源にまで遡る試み**であった。フェヒナーという、**実証的自然科学の徒でありながらロマン主義的自然哲学者でもあったユニークな思想家**に関する研究を進める中でしかし、ヨーロッパに連綿と伏流し、**フェヒナーへと合流していく水脈**、ならびに(ヘッケル、マッハ以外にも)**フェヒナーから流出していく水脈が、予想を超えて存在**することに想到した。

本申請は以上のように、これまでの研究成果に基づきながら、申請者のこれまでの研究成果を更に発展させようとする意図を背景としていた。

## 2. 研究の目的

自然**科学**が自然から神を排除し、自然を分析と物理化学への還元が可能な対象にした時代にもなお、スピノザの「神即自然」に集約される一元論的で神秘主義的な自然**哲学**の水脈は連綿と伏流していた。

本研究は19世紀ドイツのユニークな思想家、グスタフ・テオドル・フェヒナーへと合流していく、自然科学と自然哲学的秘儀(エゾテリウム)が独特に混交した「一元論的世界観」の水脈をたどるとともに、フェヒナーから流出していく思想の水脈を、特にフロイトに探ることを目的とする。

## 3. 研究の方法

平成24年度には、特に「精神と物質」、「心と身体」、「神と自然」の関係に焦点を当て、各種文献にあたりながら、「一元論的世界観の流れ」を系譜学的な観点に立って概観した。それと並行してフェヒナーがフロイトへ与えたインパクトを示す資料・文献を調査・収集した。

平成25年以降はそれに基づき、フェヒナーの「精神物理学」がどのようにフロイトの「精神分析学」と接続しているかを分析した。

本研究全体の構想を図に示す。本申請期間に遂行する予定であった研究は、下図の

太い矢印の部分である。(細い矢印で示され、破線で四角に囲まれたテーマに関しては、平成 20 年～22 年に受けた科学研究費補助金での研究で遂行されたものである。)



### (1) 系譜学的な観点から一元論的世界観の流れを概観

古代ギリシアに発祥し、中世、ルネサンスを経、さらに「科学革命」の時代を超えて、自然科学的世界観の裏面を流れ、現代にまで息づく一元論の思想を特に「精神と物質」、「心と身体」、「神と自然」の関係に注目して分析した。

### (2) フェヒナーからフロイトへの接続に関する資料の収集

ウィーンの「ジークムント・フロイト博物館」に付属する文書館(Sigmund Freud Museum Wien Archiv)を利用し、その「テキストアーカイブ」部門で、フェヒナー関係の資料・文献を調査・収集した。

### (3) 著作と収集した資料・文献に基づき、フェヒナーからフロイトへの接続の分析

平成 24 年度に収集したフェヒナーとフロイトの連続性に関する資料・文献を駆使しながら、フェヒナーの『精神物理学原論』(1860 年)がフロイトの無意識の理論にどのようなインパクトを与えたかを、特に『夢判断』(1900 年)を素材に分析した。またフロイトがフェヒナーをどのように理解して、自らのメタ心理学の概念(「心的エネルギー」、「局所論」等)を構築していったのかを分析した。さらに、フェヒナー研究においてもほとんど触れられないフェヒナーの「しゃれ」や「機知」に関する著作をいわば「発掘」し、フロイトの「日常生活の精神病理学」(1901 年)における「言い違い」や「機知」の研究との関連を分析した。

## 4. 研究成果

(1) 2012 年度の論文「『精神物理学原論』の射程 フェヒナーにおける自然哲学の自然科学的基盤」では、フェヒナーの自然科学方面における主著『精神物理学原論』(1860 年)を詳細に分析し、フェヒナーがこの著書で、1848 年に刊行した『ナンナ - 植物の魂の生活について』および 1851 年の『ツント・アヴェスター』における自然哲学的な叙述から、自然科学的な数学的実証性を重視する叙述へと大きくシフトチェンジしていることを指摘した。

また、フェヒナーが精神的・心理的な運動には必ず物理的な変化が伴っていることを確信しており、それを計測する方法論を生み出して、いわゆる実験心理学の祖とみなされるようになった経緯を明らかにした。その際重要なのは「閾」の概念であった。ある刺激の存在を感知できるためには、刺激が「一定の強さ」を超えなければならない。さもないとそれがそもそも刺激として感じられないからである。この「一定の強さ」をフェヒナーは「閾」と名づけた。

刺激が「閾」を超えた場合、人はそれを意識することができる。しかしながら「閾」の下で物理的な刺激が連続している場合でも、人間はそれを感知できないことが多い。フェヒナーはここから、意識できない閾下にも心理的な運動があることを推測し、それを「無意識」とした。後にフロイトがフェヒナーに魅了されたのも、このようにフェヒナーが無意識を措定したからに他ならない。

(2) 2013 年度の論文「フェヒナーにおける光明観と暗黒観の相克 グスタフ・テオドル・フェヒナーとその系譜(5)」では、フェヒナー晩年の著作『光明観と暗黒観の相克』(1879 年)が分析された。フェヒナーはその生涯の最晩年に、友人知人の勧めに従い、これまでの自分の思想をまとめ、より平易な言葉で書き残すことを決意したが、その結果

がこの著作であった。フェヒナーはこの著作では再び自然哲学的な思弁を展開し、精神的・心理的なものの背景に物理的運動が措定されるとすれば、その裏面として物理的なものにも精神的・心理的なものが伴っているはずだと考え、万物に靈魂が宿っているという、汎心論的な世界観を唱えた。さらにその精神・心理を統括するより大きな精神として神の精神を措定し、世界は神の精神の分有によって満たされているという汎神論に到達した。これをフェヒナーは「光明観」と呼び、一つの信仰を打ち立てるに至った。

(3) 2014年度の論文「フェヒナーからフロイトへ(1) グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(6)」では、以上のようなフェヒナーの思想が、精神分析学の創始者フロイトに与えたインパクトについて論じた。この論文では、フェヒナーとフロイトというテーマに関する先行研究を、ウィーン「ジークムント・フロイト博物館」に付属する文書館における調査資料に基づいて紹介し、両者の細かい学説の比較に先立って、フェヒナーとフロイトの、偶然とは思われない伝記的な並行性や思考の傾向の近似性、たとえばオカルト的なものへの興味、死に関する思考との取り組み等を指摘した。

(4) 2015年3月の論文「フェヒナーからフロイトへ(2) グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(7)」は、(3)に挙げた論文の続編である。ここではフェヒナーとフロイトの個々の学説を、力動的(dynamischな)観点、局所論的(topologischあるいはtopischな)観点から詳しく取りあげて比較し、フロイトがフェヒナーから何を学んだかを、『夢判断』(1901年)、「日常生活の精神病理のために」(1901年)そして「機知とその無意識との関係」(1905年)というフロイトのテキストに添って分析した。

フロイトにとって最も重要なフェヒナーの概念は「舞台の交替」(Schaupletzwechsel)

である。「舞台の交替」説を約言すればそれは「夢と覚醒時では、心理的な活動の舞台が根本的に異なっている」ということになるが、これによってフロイトは、特に無意識的な活動が意識とは異なる局所で行われるという見解に達したのである。局所論はフロイト初期においては「意識・前意識・無意識」(第一次局所論)とされるが、後期においてフロイトはそれを「自我・超自我・エス」とカテゴライズしている(第二次局所論)。

以上の研究成果は、本邦における本格的なフェヒナー研究に先鞭をつけるものであり、このユニークな思想家を日本に紹介した意義は大きい。今後はフェヒナー研究にこれまでのヘッケルやマッハ研究を系譜的に接続し、ひとつの思想史として呈示する作業が残されてる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

1. 福元圭太: フェヒナーからフロイトへ(2) グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(7)

『言語文化論究』第34号. 九州大学言語文化研究院. 1-20頁. 2015年3月. 【査読あり】

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1500407/p001.pdf>

2. 福元圭太: フェヒナーからフロイトへ(1) グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(6)

『言語文化論究』第33号. 九州大学言語文化研究院. 39-54頁. 2014年10月. 【査読あり】

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1470429?hit=48&caller=xc-search>

3. 福元圭太: フェヒナーにおける光明観と暗黒観の相克 グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(5)

『かいろす』第51号. かいろすの会. 18-39

頁. 2013 年 12 月. 【査読あり】

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1398517?hit=-1&caller=xc-search>

4. 福元圭太:『精神物理学原論』の射程 フェヒナーにおける自然哲学の自然科学的基盤

『西日本ドイツ文学』第 24 号. 日本独文学会西日本支部. 13-27 頁. 2012 年 11 月. 【査読あり】(グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(4)に相当する)

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/25929?hit=-1&caller=xc-search>

〔学会発表〕(計 1 件)

1. 福元 圭太:「モデルネにおける『人間の刷新』(「ドイツ民族主義宗教運動研究会」)(他の発表者は、青木良華、斎藤萌、長迫智子、丸山空大、Jeong Hwa Choi (ソウル国立大学)。於:立教大学、東京都豊島区池袋。) 2014 年 2 月 22 日。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

福元 圭太 (Keita Fukumoto)

九州大学 大学院言語文化研究院 教授

研究者番号: 30218953